



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2025 年 3 月 1 日 第 13 号

いったん立ち止まり

DPC 所長 齋藤 衛



前号ニュースレターで「デール・パストラル・センター (DPC) 発足当初の目的は、10 年を経てさらに切実な求めとされている」と私は記しました。その思いはいささかも変わりませんが、このたび、DPC の運営委員会ならびに所員会は、2025 年 3 月末をもって本 DPC を休会とすることを決めました。たいへん残念な思いと共に、ここに謹んで皆さまにご報告申し上げます。関係する皆さまのこれまでの貴いお祈りとご支援、そしてさまざまなプログラムに参加して下さった方々の熱意に、心より感謝申し上げます。

DPC は日本ルーテル神学校の附属機関として位置づけられております。お聞き及びのことと思いますが、2025 年度以降のルーテル学院大学と大学院の学生募集停止が決まりました。教職員は、現在学んでいる学生たちに対して、最後の一人が卒業するまでその教育研究の環境を確保し、責任を果たすことを第一のこととしています。学内すべての力をその一点に集約しています。それに伴い神学校も全てにわたってその影響下にあります。加えて神学校の特別な事情は、私をはじめ 2024 年度末で定年となり引退する教員が複数名あり、専任で神学教育に責任を持つ教職を確保することが困難となっていることです。今後適切な教育体制を、教会と共

に新たに組み立てなければなりません。

これら全体の現状を踏まえ、神学校の附属機関である DPC は、ここでいったん足を止め、今後の新たな神学校体制が整えられていく中にその働きを委ねることといたしました。休会中もこれまで DPC が取り上げてきた課題を神学校の継続課題として検討する事項としています。DPC が取り組んできた働き、とりわけ現任牧師の継続研修は、神学校の大切な使命だからです。教会の牧会をどのように確かなものとし、また深めるか、あるいは牧師の霊的な養いをどうするかは、これまでと変わらぬ課題です。

これからはそうした使命と牧師たちの思いを集め、たとえ細々とでも牧会を問ひかけ互いに養いを得る活動に取り組むこととなるでしょう。それまで、DPC をしばしの休会とすることを、どうぞご理解ください。

今後も神学校は教会の大切な命脈として残されます。新しい形で新しい人と共に、再開の扉が開かれるよう心より願うものです。これまで DPC の働きに力を尽くして下さったすべてのかたがたに重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

いったん立ち止まり、呼吸を整えて備えてまいります。

DPC 休会に伴い、「DPC ニュースレター」は本号をもちまして当面の間休刊いたします。本号は、10 年間の DPC の活動報告と記録のための特別号としました。本文中の呼称を「DPC」に統一し、一部を除き氏名の敬称を略します。

パストラル部門

人間の困難や悲嘆に主イエスは限りない愛をもって慰めと励ましを与えられました。それによって人は、もう一度立ち上がることができたのです。牧会はこの愛と希望を分かち合う場と言えるでしょう。しかしながらこれがそう簡単ではありません。互いを受容し信頼関係を作ることの難しさ、また牧会者の疲弊など……。神による「魂の配慮」が、牧会者を通し教会を通して妨げなく広がり、深まり行くよう私たちに何が求められるのか。パストラル部門はこれを検討しプログラムを提供してきました。

以下に、パストラル部門の活動から「牧会研究会」と「臨床牧会セミナー」を振り返ります。(齋藤 衛)

牧会研究会の歩み

所員 関野 和寛

DPC 設立 2 年後の 2016 年 4 月よりパストラル部門の働きとして牧会研究会がスタートしました。

DPC が神学校の附属機関であることは、何よりもその働きが教会への貢献を第一の使命としていることを表しています。教会の牧会力を高めること、そのために具体的に計画された活動がこの牧会研究会でした。

受講生は牧師および教職 10～25 名、年間 10 回のコースとして日本福音ルーテル東京教会を会場に開始しました。コロナパンデミックの最初の年 2020 年は休止となりましたが、その後 2021 年度からは 2023 年度および牧会研究会 Plus (後述)を除き Zoom を用いてのオンライン開催としました。実際に顔と顔を合わせて同じ場を共有するという大事な要素を失うこととはなったものの、関東以外からの参加者も増えました。

本研究会の意義としては、①牧会カウンセリングの基本的な知識の学び、②現代の教会、牧師が向き合うべき分野の学び(精神障害、結婚、家庭、死と葬儀、自死、パーソナリティ障害、グリーフケア、ジェンダー、教会内の人間関係、牧師のセルフケアなど)、③受講生たちによる相互牧会ということがあげられます。

牧会研究会では、DPC として一連の学びを認定して行くことで、学びの専門性を担保していくことにも注力をしました。また参加者たちの中で豊かで慰めに満ちた交流が持たれるのも本研究会の特徴でありました。

特に牧会者という職業は社会の中で孤立しやすく、問題をひとりで抱え込んでしまったり、同じ教団内の仲間に相談しにくい状況が起こったりします。その中で燃え尽きてしまうことや、メンタルに支障をきたし休職を余儀なくされるケースも非常に多く起こります。だからこそ座学の学びだけではなく、講師、受講生が同じ空間に立場や所属を超えて共に会し、本心を打ち明け、互いに励まし合うことができる場は極めて重要であると言えます。

初年度は賀来周一と堀肇が講師を務めました。その後、石居基夫、齋藤衛、ジェームス・サック、関野和寛が加わりました。2018 年度をもって賀来周一が講師を引退。賀来周一と共に牧会研究会の立ち上げから力を尽くした堀肇が 2023 年 5 月に急逝されたことは DPC 所員そして受講生にとって深い悲しみでありました。

2021 年度に日本聖公会の成成鍾を、2024 年度には日本基督教団の三村修を講師に迎え、ルター派だけに留まらないエキュメニカルな組織として拡がりを大きくしていきました。

なお、2024 年 8 月には三村修をファシリテーターに「牧会研究会 Plus」として 1 泊 2 日のワークショップ型の研究会を開催しました。

右ページに各年度の内容と講師のご紹介をします。(それぞれの年度で開催月順)



2016 年度（参加者 23 名）

- ・現代人へのストレスケア（堀肇）
- ・教会と一般社会集団の違いから見た牧会上の諸問題（賀来周一）
- ・教会生活・牧会生活の疲れへのケア（堀）
- ・スピリチュアルペインについて考える（賀来）
- ・ライフサイクル上の課題へのケア（堀）
- ・自死を巡る牧会上の問題（賀来）
- ・葬儀とグリーフケア（堀）
- ・生きづらさを抱える人々へのケア（賀来）
- ・パーソナリティ障害への対応（賀来）
- ・心の病を抱えて生きる人と教会（賀来）

2017 年度（14 名）

- ・傾聴－親身に聴く（堀）
- ・癌患者への寄り添い（ケネス・ハーグ）
- ・共感－感情を共にする（堀）
- ・ルターの牧会（賀来）
- ・受容－存在を受け入れる（堀）
- ・専門機関と教会の連携－心の病を持つ人々のために（関野）
- ・対決－立ちはだかる（堀）
- ・沈黙・抵抗・転移－ケアの困難を乗り越える（堀）
- ・死と葬儀について（石居基夫）
- ・教会と障害者（賀来）

2018 年度（15 名）

- ・教会と精神障がい者（賀来）
- ・教会カウンセリングとは何か（堀）
- ・牧師と信徒との共同牧会 1（関野）
- ・キリスト教人間観・人格論（堀）
- ・ジェンダーについて（ジェームス・サック）
- ・教会カウンセラーの態度（堀）
- ・牧師と信徒との共同牧会 2（関野）
- ・教会事例研究－牧師と信徒 1（堀）
- ・看取りの牧会（石居）
- ・教会事例研究－牧師と信徒 2（堀）

2019 年度（19 名）

- ・現代社会の孤独を考える－ロンリネスからソリチュードへ（堀）
- ・信徒の賜物を用いる－教会の業としての牧会（関野）
- ・ジェンダーについて－多様性の時代に（サック）
- ・役員会とスーパービジョン－寄り添う力を作る（関野）
- ・現代日本文化のスピリチュアリティと牧会－占い・迷信・前世（石居）
- ・グリーフ・ワーク 愛する者を失った時（サック）
- ・牧師自身の霊的養い－聖なる読書のすすめ（齋藤）
- ・一人となることの霊性－孤独・沈黙・出会い（齋藤）
- ・ネット時代の牧会－Eメール、SNS など（石居）
- ・寄り添いについて考える－援助から共にいることへ（堀）

2021 年度（15 名）年間 4 回開催、オンライン

- ・Covid-19 の時、牧会者のスピリチュアルなケアを考える－牧会者が自分自身を大切にすること（サック）
- ・「寄り添い」について考える（堀）
- ・「牧師のライフサイクル」を考える（堀）
- ・霊的同伴を歩む（成成鍾）

2022 年度（11 名）、オンライン

- ・教会カウンセリング講座 1－家族心理学の応用（堀）
- ・人間のパーソナリティ（気質）に基づくカウンセリング（サック）
- ・教会カウンセリング講座 2－発達心理学の応用（堀）
- ・これまでの日本の教会とその課題（関野）
- ・教会カウンセリング講座 3－交流分析の応用（堀）
- ・霊性と牧会（成）
- ・教会カウンセリング講座 4－フランク心理学の応用（堀）
- ・スピリチュアル・ペインとそのケア（サック）
- ・教会カウンセリング講座 5－心理療法とキリスト教（堀）
- ・看取りの牧会、哀しみの時を豊かな時間に（関野）

2023 年度（12 名）、対面開催

- ・感情へのケア「うつ」（堀）
- ・カウンセリングの道具としてのジェノグラムとリフレミング（サック）
- ・心（感情）と信仰の問い（石居）
- ・教会と霊性（成）
- ・罪と恥（サック）
- ・教会者の日常霊性（成）
- ・教会の権威と範囲（関野）
- ・パーソナルケア vs パストラルケア（関野）
- ・コミュニケーションマップと境界線（関野）
- ・臨床における牧会（関野）

2024 年度（23 名）、オンライン

- ・牧師のセルフケア（サック）
- ・いのちにつながるコミュニケーション 1（三村修）
- ・いのちにつながるコミュニケーション 2（三村修）
- ・クリスチャンでない人々の看取り（関野）
- ・教会者の心（石居）
- ・教会者と霊性修練 I－準備過程（成）
- ・若手・新人牧師に必要な防衛－教会内批判者論理から（関野）
- ・教会者と霊性修練 II－理論と実践（成）
- ・聖人君子からの脱却－インターナルシステム理論（関野）
- ・教会者と霊的同伴（成）

牧会研究会 Plus 2024 年 8 月（宿泊ワークショップ）

- ・いのちにつながるコミュニケーション 3－和解の出来事に仕える（三村）

【開催に関して】

近年、社会情勢の変化もあり、教会における牧会はこれまでになかったような多様な課題に直面しているように思います。他方、教職の人数は減り、兼任・兼牧に忙しくなって教会も牧会の現状も大きく変化してきました。神学校時代の学びだけでは追いつかない現実を生きる牧師たちを支える実践的なプログラムが求められたのです。そこで、日本ルーテル神学校では半世紀にわたって毎年開催してきた教職者対象の「教職神学セミナー」を隔年で DPC による臨床牧会セミナーとして開催することにいたしました。

DPC の発足に伴って、より現場のニーズに応える臨床的な学びにシフトすることにもなるという判断は、牧師たちに継続的な研修機会を作るという意味で大切な企画となったように思います。同時に教派を超えてこの企画を紹介し、共に学ぶ機会としたこともエキキュメニカルな時代に相応しいものだったと思っています。

【テーマ】

毎回、臨床牧会セミナーではその年の研修プログラムのためのテーマを掲げてきました。このタイトルを見るだけでも、今の時代に教職者であるということとどのような現実と直面していると感じ、何を必要と考えたのかということがよく伝わるように思います。各回のタイトルは以下のとおりです。

第 1 回「それでも、主を見上げて～牧会の光と闇～」、第 2 回「時代を生きる苦悩～魂にふれる牧会」、第 3 回「危機のただ中に立つ牧会～あなたを支えたい～」、第 4 回「いま、教会の牧会は～COVID-19 の只中で見ていること～」、第 5 回「暗闇の中で 助けを必要とする牧会者」、そして第 6 回「召命の再確認－『主がお入り用なのです』(ルカ 19:31)」。

現代社会に傷ついた人たちがいかに多くあり、また牧会の務めが重要であるかという深い問題意識と、この牧会を担う牧会者もまた疲弊し、助けを必要としているのではないかということへの危機感とがあり、なんとかその牧会者と牧会を支えていくことができないかと考えてきたことがこれらのタイトルに

現れているように思います。

【セミナーの導入】

第 3 回までのセミナーは、冒頭の基調講演によってセミナーを始めました。第 1 回は「ルターと牧会」(鈴木浩)、第 2 回は「青年ルターと『こころ』の問題」(江口再起)、そして第 3 回は「ぶっ壊して、造り上げる牧会のダイナミクス」(関野和寛)でした。教会や牧会の神学的確認と、私たちが一人の牧会者として抱えている現実的課題を確認することから、セミナーで学び合う導入をいただきました。

時代に生きる人々の深い魂の問題に神の働きがどのように働き、教会が生かされていくものと捉えてきたのかという神学を確認することで、参加者の日頃の取り組みを神学的に考える道筋が整えられたように思います。

実は、セミナーでは基調講演とともに特別な取り組みを試みました。参加者が教派も地域も教会の状況も全く違う文脈から集まるということもあって、全員が共通の話題やイメージ、言葉やシンボルなどを持つことができると、最初の日の夜に短い映画鑑賞をしたのです。

第 1 回目はフィンランド映画「ヤコブへの手紙」(クラウド・ハロ監督)で、盲目の老牧師ヤコブと恩赦によって出所しヤコブ牧師の元に身を寄せ働くレイラという女性が主人公の映画。孤独や罪責感を生きる人間とはどういうことなのか。牧師の祈りやつとめは誰を生かし癒すものなのかと、牧会者である自分への深い内省を呼び起こす映画が参加者をこの学びへと導入するものとなりました。

第 2 回目は「マザー・テレサ ー愛 苦しみ 祈りー」。ノーベル平和賞を受賞し、献身的にコルカタで死にゆく人びとに仕えたマザー・テレサ自身の葛藤、苦しみ、深い闇に焦点を当てた映画。私たちは牧会者として働きつつも、自身としては決して救いの見えない中に佇む絶望や神義論的な問いを抱えざるを得ない。そうした実存を、それでもなお生きて奉仕するマザーの苦悩に重ねつつ、牧会者であるということを捉え直す機会となりました。

第 3 回目は YouTube 配信で鑑賞しました(タイトル等不明)。ルイジアナ州の刑務所内での終身刑服役者に対するスピリチュアルケアの重要性、また特に刑務所内に神学校を導入し受刑者が訓練を受けて、

他の受刑者に教え、ケアを行うという実践的取り組みを紹介するものでした。私たち人間存在とは何か、また神によって生かされる信仰が創造する新しい生の可能性に驚かされつつ、牧会というものが神によってもたらされる出来事であることに深い気づきを与えられました。

基調講演、そして映画を持ってセミナー導入がなされたことで、私たちに牧会者であることへの深い内省を促し、学びが豊かにされたと思います。

【分科会】

第1回から3回は2日目の午前と午後にそれぞれ4つの分科会を設け、参加者には午前に1つ、午後に1つと計2つの分科会を希望によって選んでいただく方法を取りました。この分科会は今の教会における具体的な課題について学び合うためのプログラムでした。それぞれリードしてくださる先生をお招きして講義とディスカッションで学びを深めました。当初3年分の分科会のタイトルと講師は以下のようになります。

2015年は①グリーフケア（大柴譲治）、②教会と人間関係（堀肇）、③牧師のメンタルヘルス（石丸昌彦）、④高齢者と教会（賀来周一）、2017年は①教会と青年（松谷信司）、②女性とDV問題（松浦薫）、③ジェンダー（平良愛香）、④自死と牧会（賀来周一）そして2019年は①心の病～牧会者として心得ておきたいこと（河村従彦）、②教会とハラスメント（城倉由布子）、③現代の結婚事情を考える（堀肇）、④高齢者の危機—その援助と克服を考える（賀来周一）

こうしてみると、年代別の課題はもちろん、ジェンダーやハラスメント、DVなど現代の日本社会に生きる人々の抱える具体的な課題を共有してきたことがわかります。地域社会の中での牧師自らの問題として、また身近な方々の困難に寄り添うための学びを成し得たのではないかと考えています。

【オンラインでの開催】

コロナ禍によって、第4回、第5回はオンラインでの開催となりました。

第4回は3つの講演によって導かれる学びでした。講演Ⅰ：「新しい牧会様式」（吉岡光人）、講演Ⅱ：「見よ、今や恵みの時、見よ、今こそ救いの日—豊かなる

大地に守られながら、一人ひとりに寄り添って—」（武井陽一）、講演Ⅲ：「コロナ禍の中の教会の在り方—マルタたちの居場所 イエスのキッチン」（梁熙梅）。

2021年の2月といえば、ご理解いただけるかと思いますが、コロナ禍によって礼拝や諸集会の開催が極めて困難となった現実、新たな牧会の課題を受け止めていた時でした。信徒の限られた教会生活に、実は、現代社会の分断や孤立という状況を生きる人々の「心」の問題が如実に映し出されていたことだったと思うのです。

第5回は「暗闇の中で 助けを必要とする牧会者」（石居基夫）の基調講演、さらに2名の牧師の発題を受け、ファシリテーターである三村修に導かれて小グループでの話し合いを重ね、それぞれが教会の現実を分かち合い、牧会者としての工夫や、苦悩と喜びを語り合う時間を持つことができました。牧会者同士だからこそ、共感とともに信仰において与えられる気づきがあり、教会とは何か、牧会とはどのように起こっていくのかということ深く受け止めていく時間になったと言えましょう。

【霊性の養い】

こうしたセミナーを重ねてきて、改めて、牧師たち自身が現実を受け止め、実際に苦しんでいるさまざまな人々に対応するために必要な情報や知識・技術を得るということの重要性を感じてきました。

しかし同時に、牧師たちが自らの魂の深い渇きに癒しや慰め、励ましを必要としていることにも気付かされました。セミナーの機会に交わりをもち、語り合い、祈り合うことがとても大切なものと感じられたのです。とりわけコロナ禍を経験して対面でその人を感じる大切さも思わされました。そして、これまでのセミナーを経て思い至ったことは、やはり真の牧会者である神との関係に牧師たち自身が生かされ養われる、そのようなプログラムが必要であるということでした。

この報告書をまとめている中で、第6回臨床牧会セミナーがリトリートのかたちで企画されました。神と向き合い、そのみ声を聴き、語り合う場を用意したいという、その意識から生まれたものとご理解いただければと思うのです。

スピリチュアル部門

キリスト教霊性（Christian Spirituality）は、日本のプロテスタント教会においてはあまり顧みられてこなかった分野だと思われます。一方で、現代人の孤独や生きづらさの現実に関教会がどうアプローチするのかが課題としてあります。

スピリチュアル部門では、キリスト教霊性の歴史に学びつつ、今の教会に提供できる霊的プログラムを模索し提供してきました。それは霊的共同体としての教会をもう一度見つめ直すことであり、牧会にも示唆を与える作業でした。スピリチュアル部門の中心であるスピリチュアリティ研究会を振り返ります。（齋藤 衛）

スピリチュアリティ研究会

所員 ジェームス・サック

私は、PGC（人間と成長カウンセリング研究所）とも、また DPC とも深く関わって仕事をする機会に恵まれました。

DPC 設立当初のパンフレットには次のように書かれていました。

「クリスチャン・スピリチュアリティ(キリスト教霊性)を中心に据え、深まりと広がりをもってスピリチュアリティについて研究します。現代社会において、孤独と霊的渇きは深刻な課題ですが、これに対して教会はどのように応えるのでしょうか。その的確な応答を見出すために、クリスチャン・スピリチュアリティの歴史を検証しつつ研究します。この実りは、霊的渇きを抱くキリスト者に対しても生かされるべきで、リトリートやその他プログラムを整え、教会に提供します。」

私が DPC ニュースレター8号（2022年6月）に書いた中から、いくつか短く紹介したいと思います。その時、私は PGC と DPC を次のように比較しました。

「PGC も DPC もキリスト教の人間理解に基づいていました。DPC はルーテル教会およびエキュメニカルな交わりにある諸教会を力づけ、牧師の牧会力を高め、信徒の霊性を養うことを目的としました。

DPC は3つの領域があります。パストラルの領域、ソーシャルの領域とスピリチュアルの領域です。」「スピリチュアルの領域では、教会と現代社会におけるスピリチュアリティ（霊性）の研究と、教会・信徒の霊的成長のためのプログラムを始め

ました。ここではクリスチャン・スピリチュアリティの歴史を学んで、このテーマを掘り下げます。この勉強を通して、現代の教会にどのように貢献できるかを考えます。」

私は牧師としても教育者としても、継続的な教育（生涯教育）を受けることはとても大切なことだと考えています。そのような刺激がなければ、教育や牧会に携わる人たちは、何年にもわたって同じようなことを繰り返しがちであり、鋭さや創造性を失うことになるのです。

そういう意味で私は、DPC スピリチュアリティ研究会が参加者に1つの刺激を提供しようと努めてきたと言うことがふさわしいと思います。

このことから、この研究会が教会と社会に霊性をもたらしするために始められたことがお分かりいただけるでしょう。しかし、牧師や教育者は、それぞれの専門分野でより多くのことを学び、説教や教育に役立てるための刺激を受けるだけでなく、いち個人として成長し、学ぶための刺激も必要だと強く思います。言い換えるなら、説教作成や聖書研究に役立つようにと祈ったり聖書を読んだりするだけでなく、個人的に、自分自身の信仰において挑戦し、成長する時間も絶対に必要だと思うのです。自分自身のために神のみ言葉を吸収する時間が必要です。私たちは、仕える人々のためだけでなく、私たち自身のためにも神の御前で祈る時間が必要なのです。

そのため研究会の立ち上げにあたり、DPC では参加者が職業的に役立つ大切な学びをすると同時に、自分自身の成長の機会も得られるような場づくりを心がけてきました。

このスピリチュアリティ研究会がスタートした最初の数年間は、DPCの所員4人が2ヶ月に1度集まり、本や記事を読んだり、自分たちの経験を分かち合ったりしました。通常、私たちは前もって本を読み、その本の内容や自分たちが受け取ったものについて話し合いました。このことによって、一般的な霊性と私たち自身の個人的な霊性について深く語り合ううえで非常に良い基盤が備えられたのです。研究会のメンバーは、それぞれが自ら経験した霊性の様々な見地を分かち合いました。

研究会では、メンバーは関心のあるテーマについての発表をし、意見を交わし、互いに学び合いました。フィリップ・シェルドレイクの著書『キリスト教霊性の歴史』からはいくつかの主題で何度も話し合ったものです。その後の会では、フランスのテゼ共同体、シモーヌ・ヴェイユ、カルメル会、マルティン・ルターと彼の霊性に関する考察、またドミニコ会などのテーマも話し合いました。さらには「砂漠の教父」、ティク・ナット・ハン、トーマス・マートン、ヘンリ・ナウエン、ケネス・J・デールらの著作を読み、ディスカッションをしました。また、ケネス・リーチ著『魂の同伴者』や、アリスター・E・マクグラス著『キリスト教の霊性』を読んだ後にも、意義深いディスカッションが行われました。

何度かの研究会では、沈黙の意味と、それが私たちの霊的实践にどのように用いられるかを考えました。また別な時には、様々な教会で実際になされている異なるやりかたでの聖書研究を実験的に行いました。

時が経つにつれて、私たちは、スピリチュアリティ研究会にDPCの所員に限らず参加者を広げて迎えることが重要だと思い至り、所員以外からの2名が私たちの続けている霊性についての学びに加わりました。

霊性に関して、最後にもう2つの分野について考えたいと思います。それは霊的同伴(Spiritual

Direction)とレクチオ・ディヴィナ(Lectio Divina)です。スピリチュアリティ研究会のメンバーたちは以前霊的同伴を行ったことがあったので、何回かの会でその方法について話し合いました。英語では通常“Spiritual Director”と呼びますが、director(ディレクター、導く者)という表現には問題があります。実際のディレクターは神であって、聴き手はディレクターというよりも、傍らに伴う友人なのです。そのため、同伴者あるいは魂の友という言葉を使うのです。

レクチオ・ディヴィナもまた、スピリチュアリティ研究会にとって重要なテーマでありました。これは文字通り「聖なる読書」を意味します。これは聖書に没頭する方法であり、ニュッサの聖グレゴリオスによって紹介されました。聖書を通して語られる神の声に深く耳を傾ける古代の実践法です。

これには以下の4つの段階があります。

1) Lectio(読書)、2) Meditatio(黙想)、3) Oratio(祈り)、4) Contemplatio(観想)です。

この実践の目的は、聖書に関する頭でっかちな知識を身につけることではなく、神との深い出会いを目的とするものです。

最後にお伝えしたいのですが、DPCスピリチュアリティ研究会が中心となって、2025年2月11日・12日に第6回臨床牧会セミナーを計画しました。テーマは「召命の再確認－『主がお入り用なのです』(ルカ19:31)」です。このセミナーはまさに牧会者自身の霊性の養いのためのものです。

今後、日本ルーテル神学校も体制に少なからず変化があるでしょう。DPCもいったん休会として新しい神学校の体制が整った暁に再出発することになりました。神学校がDPCの取り組んできた継続教育の機会を提供することは不可欠だと思います。そしてその時に、スピリチュアリティ研究会もまた再スタートできることが私の願いです。もちろん、神学校全体の変化がまず整えられたときに初めて、DPCがその新しいシステムの中でどのように備えられるかということが明らかになるでしょう。

ソーシャル部門

グリーフ（grief）はしばしば悲嘆と訳され、身近な人との死別や離別、予期せぬ病気や災害など、大きな変化に伴う心理的・感情的・身体的ないたみのことをいいます。

DPC の働きの柱の 1 つであるソーシャル部門では、だいじな方との死別後に個々のグリーフが尊重され、心身の安全と安心が守られる場づくりとして、「だいじな人をなくした子どもの集まり」と「だいじな人をなくした子どもの保護者の集まり」（以下、「子どもと保護者の集まり」）を同時開催してきました。

以下に、グリーフサポートの活動を振り返ります。

（小嶋リベカ）

グリーフサポートの 27 年間

所員 小嶋リベカ

活動のはじまり

「子どもと保護者の集まり」の理念は、米国で先駆的に死別体験をした子どもと家族を支援するダギーセンター（The Dougy Center）の理念を継承するものです。「すべての人はサポートされ、理解される環境の中で死別体験による心のいたみを感じ、表現する機会を与えられるべきである」という理念です。

「子どもと保護者の集まり」は、中学生以下の子どもとその保護者を対象に、大学構内の施設で隔月 1 回（2 時間半）開催してきました。

初回の集まりは、1998 年に「人間成長とカウンセリング研究所」（PGC）で開催されました（詳細は DPC ニュースレター第 9 号をご参照ください）。2012 年の PGC 閉所後も、全国的に子どもを対象にグリーフサポートを提供する場が限られていること、長年の実践を継承していく意義があることから、DPC にバトンが託され、DPC におけるグリーフサポート研究会がその中心的な役割を担うことになりました。

行ってきたこと

1998 年以降の活動実績としては、子どもの参加人数は延べ 700 名強、保護者の参加人数は延べ 300 名弱でした。初回に参加した子どもが「もう 100 回やりたい！」と語っていたこの集まりは、27 年間で 145 回開催しました。

「子どもと保護者の集まり」で何よりも大切にしてきたことは、参加者が安心できることです。そのために 2 つのことを変えずに行ってきました。

まず 1 つ目は、毎回、ほぼ同じプログラムを提供することです。子どもにとって突然の死別は当たり前の日常が奪われ、コントロール感が失われるような体験です。コントロール感を少しでも保てる機会になるように、集まりにおいて子ども自身が「何が起こるのか」を知っていること、決められた時間の枠がありつつも「何を表現したいか」という主体的な遊びによる表現の選択ができることを大切にしました。子どもの集まりの流れは、最初の 10 分間で自己紹介やルール確認を行い、次に各自が自由に遊び（写真 1）、おやつを挟んでさらに遊んだ後、最後の 5 分間でみんなで輪になって気持ちに区切りをつけ、日常にもどる準備をします（写真 2）。



写真 1



写真 2

子どもが安心できるための 2 つ目は、8 つのルールを各部屋に常に掲げていたことです。紙面の都合上、1 つだけ挙げます。先述のダギーセンターでは「What we say here, stay here (ないしょはないしょ)」というルールがあります。親子間であっても、許可なく何かを報告されることはなく、子どもの思いが尊重されるのです。

これらのプログラムやルールが「個々が心のいたみを感じ、表現する場」の安心を確保し、集まりを安定的に継続し得た根拠であったと思います。

なお、「子どもと保護者の集まり」の詳細および参加者の声については、2016 年の『ルーテル学院研究紀要 49』所収の「子どものグリーフサポートグループの意義を考えるールーテル学院大学および日本ルーテル神学校における 17 年間の子どもの集まりの取り組みを通して」に掲載されています。

ファシリテーターについて

「子どもと保護者の集まり」を実施するうえで、ファシリテーター（参加者に寄り添う存在）の養成はとても大切です。グリーフサポート研究会がその役割を担っていました。毎年 2 日間にわたってファシリテーター研修会を開催しました。1 日目にグリーフおよび子どもの発達などに関する基礎知識を学び、その後に自らの

重ねてきた喪失体験に気づき、向き合うための時間を設けました。2 日目は、実際に子どもの主体性を重んじる「関わりの技法」を習得するための時間を設けました。その後に実践的な場面に沿った設定で、遊ぶ子ども役や見守るファシリテーター役になり、ロールプレイを行いました。研修後は、子どもの集まりに約 1 年間は研修生として関わり、ファシリテーターとして継続的に活動に携わる意思を持てるか確認した後に、グリーフサポート研究会にメンバーとして加わるプロセスを踏んでいました。

ファシリテーター同士の研鑽（グリーフに関する論文や著書を学ぶ等）の場も、年 6 回開催しました。27 年間でファシリテーターとして集まりに携わった方は 38 名です。その過半が 5 年以上継続して「子どもと保護者の集まり」に関わりました。

グリーフサポートの活動を終えるに当たって

2025 年 3 月をもって「子どもと保護者の集まり」は終わります。これまでこの活動を重ねてこられたのは、多くの方々のご理解とお力添え、そして国内外からのご寄付によるお支えをいただいたためです。

2015 年以降、三鷹市健康福祉部健康推進課（総合保健センター）には毎年のように広報リーフレットにグリーフに対する支援団体として当会の集まりを紹介いただいたことにより、近隣からの関心を寄せていただきました。深く感謝いたします。

当初は数か所だった子どもとその家族を対象とするグリーフサポートの場は、現在、全国 30 か所ほどになりました。

当会は終わりますが、PGC および DPC を通じて行われた研究および実践が、本邦のグリーフサポートの発展に少しでも寄与すること、そして「死別体験による心のいたみを感じ、安心して表現できる場」が今後も拡がることを心より願っております。

デール記念講演会

DPC の構想がなされていた頃、前身の PGC を引き継ぐ意味として「実践神学の重視、全人的人間理解、エキュメニカル、グローバルな性格」という言葉があげられていました。その具現として PGC 創始者のデール先生の名前を冠して行われた「デール記念講演会」の歩みを紹介します。 所員 石居 基夫



はじめに

デール記念講演会は、DPC が何を目指すものなのかをある意味で最も象徴的に表すものだと言って良いかもしれません。実際に DPC の正式発足を待たずして、第 1 回の講演会の企画が練られ、2014 年 4 月の発足時には開催の段取りが全て整っているほどだったのです。準備委員会の趣意書では、「デール記念講演会は、国内外から、パストラル、スピリチュアル、看取り、死生学などの分野の著名な講師を招いて、教会のみならず社会に向けキリスト教の実践的な貢献を示すメッセージを発信していく」ことが構想されていました。まさに、DPC とは何であろうとするのかということを表すものであったと言えます。現代社会に生きる私たちの魂の諸問題について、教派を超えて学びを深め、教会にそして社会に向けてキリスト教の立場から確かなメッセージを送っていくことを意図していたのです。

10 年間で 7 回の講演会は、当初構想された通りの意義深い講演会を実現することができたように思います。講師をはじめ、お集まりいただいた方々、またそれぞれの場所で心を留めてくださいました多くの方々に心から感謝を申し上げます。

第 1 回・DPC 創立記念シンポジウム

第 1 回講演会は、「デール・パストラル・センター創立記念シンポジウム」と銘打って、2014 年 7 月 23 日に日本福音ルーテル東京教会を会場として行われました。テーマは、「スピリチュアルペインとそのケア」で、講師にはヴァルデ

マール・キッペス神父、窪寺俊之牧師、賀来周一牧師を迎えることができました。司会は大柴譲治牧師で、会場いっぱいに来場をいただきました。3 人の講師の方々は「死に直面するような人生の危機における人間のスピリチュアリティ」についての第一人者たち。死に逝く人へ関わる実践のご経験も踏まえてのお話は、私たちのいのちや魂の深いところにあるスピリチュアルな問いがどのように共感され、またその痛みや苦しみに癒しがもたらされるのかということに大きな示唆をいただくものでした。

人間の生と死を支えるスピリチュアリティについて教えられたシンポジウムでしたが、これこそ、現代の社会に生きる人々にキリスト教の伝統的な牧会、パストラルケアの経験とそれを支える神学が新しい形で貢献することのできる領域であることにも目が開かれるものとなりました。DPC がどのような研究によって、実践に仕えていこうとするのか、示されたように思います。

第 2 回・加藤常昭牧師に聴く

第 2 回は、加藤常昭牧師に講師をお願いし、「魂への配慮の共同体・教会」をテーマに 2015 年 8 月 1 日に実施いたしました。加藤先生ご自身がトゥルンアイゼン師との出会いによって牧会者として新たな導きを得られたご経験からお話くださいました。教会とその牧会の形成に聖書への取り組みと説教の力は欠かすことのできないものであり、説教に活かされて互いに魂への配慮を実現する信徒の共同体としての教会形成をすることが全信徒祭

司に立つプロテスタント教会になくなくてはならないものと教えてくださいました。説教と牧会という教会の基軸に立ち、一対一の対話によってみことばが分かち合われていくことに最も大切な魂への配慮が生まれるという確かな学びをいただいたことが忘れられません。

第3回・デール先生を迎えて

そして2016年5月14日、第3回のデール記念講演会。講師には、ケネス・J・デール先生の方をお迎えいたしました。カリフォルニアにお住まいの先生が90歳になられてエッセイ集を出版された記念に来日をされた機会に、「**21世紀を生きる人間性の牧会的理解～90歳をむかえて～**」と題して、講演をいただいたものです。エッセイ集はこの同じ年に邦訳『90才の信仰エッセイ 90』としてDPCが出版しました。人間を包括的に見ることをPGC時代から提唱され「身体性」「知性」「感情」「社会性」「霊性」のそれぞれの理解を深めることの重要性を語られました。対立と分断が深まる現代社会に、聖書に基づく愛、思いやりの実践を求め続けるべきことを訴えられました。先生の豊かな、そして深い人間性に触れさせていただいた講演会でした。

第4回・全信徒祭司の教会へ

第4回は2017年5月20日、ケネス・ハーグ氏、アミティー・ハーグ氏をアメリカからお迎えし「**寄り添い人となる～全信徒祭司の教会～**」と題しての講演会でした。ハーグ氏は、信徒と教職がそれぞれの役割と働きを自覚しトレーニングすることで実現するステファンミニストリーという牧会の方法論を構築された方々です。当時東京教会でこのミニストリーを導入し、取り組まれてきた関野和寛牧師を介しお招きすることができました。今日、実際にさまざまな課題を生きる人々が社

会におられる時、教会がいかに具体的な支援を来訪者に提供できるのか。単に牧師が行う牧会という固定した考えを大きく転換し、信徒と共に実現する牧会・ミニストリーに今必要とされている教会の働きについて導かれたものでした。

第5回・エキュメニカルな学び

第5回は、2018年10月6日に、「**ここに重荷を負う人とともに**」と題して、カトリック教会の英隆一朗神父を講師に迎えました。現代社会において、心に重荷を負う、病によって生きづらさを抱える多くの方々があることに焦点を当て、教会がどのようにそうした困難を抱える人々と共に生きる共同体でありえるのか、聖書に導かれるお話をいただきました。現代社会の持つ悪魔的な力に対峙する私たちの霊性を聖書の証する神の愛と恵みに導かれる必要があることが示され、困難を抱える人たちと共に生きることこそ深い恵みに導かれると励ましをいただきました。

第6回・コロナの時に

2021年10月2日には第6回の講演会を初めてオンラインで企画しました。長く淀川キリスト教病院でチャプレンとして務めてこられた藤井理恵氏を講師に迎え、「**たましいの安らぎ—死を前にした人との関わりの中から—**」と題しての講演をいただきました。死に直面するということは、行為（do）の世界で生きる私たちがdoを失う中で存在（be）への問いが始まっていく、その苦悩にいかに関わり添うかというチャプレンとしての経験からお話くださいました。その人が人間的水平の関係を越えた、超越や永遠といった垂直的關係によってこそ存在の問いと魂の痛みから解かれていくことがある。そのご本人の姿に生かされ、また慰めと癒し、安らぎを先生ご自身が受け取ってこられた

ことを感謝の中でお話くださいました。

第7回・ルーテルキャンパスに集って

2024年11月4日は三鷹のルーテル学院キャンパスで行われた「ルーテル祭」に若林一美氏をお迎えし「いのちのメッセージ 悲しみを通してみえること」と題した講演をいただきました。これが第7回目、DPC10年間で実現した最後の講演会となりました。長年グリーフケアに携わってこられ、体験された愛する人を亡くした深い悲嘆を生きる一人ひとりとの出会いを通して、その方々の魂の輝きに触れるような言葉を紡いでくださいました。DPCがPGC時代から継続してきた「だいじな人をなくした子ども

と保護者の集まり」と響きあう言葉に、私たちの取り組んできたことの意義を改めて示していただいたような思いがしました。

最後になりますが、このDPC設立以来お支えをくださってきた賀来周一牧師を講師に「答えのないところを生きる」というタイトルで2019年度に講演会を準備いたしました。先生のご体調から、開催を断念せざるを得ませんでした。長い時間のご講演をいただくことは、もろなか叶わないことですが、賀来先生は今も変わらずにDPCのために祈りとお支えをくださっています。このことにも改めて感謝しつつ、このデール記念講演会についてのご報告を閉じたいと思います。

DPC 出版事業について

所員 石居 基夫

DPCは、10年間の中でいくつかの出版物を公にしました。

その記念すべき最初の出版は、第1回デール記念講演会としたシンポジウムの『スピリチュアルペインとそのケア』（2015年9月、キリスト新聞社）を書籍にするものでした。シンポジウスのヴァルデマール・キッペス、窪寺俊之、賀来周一の3人の先生方、そして司会の大柴譲治先生に、それぞれ限られた時間のシンポジウムでは語り切ることのできなかった内容を含めて原稿をお願いし1冊にまとめたものです。

2つ目は、ケネス・デール先生による『90才の信仰エッセイ 90』（2016年1月、私家本）です。先生が90歳をお迎えになられたときに英語で出版されたエッセイ集です。賀来周一先生を中心として所員が翻訳を分担しました。

3冊目も同じくデール先生のエッセイ集『神はいずこに 聖なる神秘の黙想』（2023年3月・谷口真理子訳・DPC監訳、キリスト新聞社）で

した。先生の二つのエッセイ集は、現代人である私たちが今日の世界の中で「神を信じること」がどのようなことなのか、真剣に問い、また素直に語られたものです。キリスト教や宗教を超えて、いのちの営みにおけるスピリチュアルな領域がどのようなものを指し示しつつキリスト信仰を証ししてくださったものです。

これら3つの書籍以外には、2018年からニュースレターを6月と12月の年2回発行してきました。所員を中心にDPCの活動を主に紹介してきたものです。開設当初から議題には上がりつつも、なかなか実現できませんでしたが、開所4年を経て発行に漕ぎ着けました。

書籍出版もニュースレターも、実務を引き受けてくださった福井貴絵子さんの存在がなければどれも成し得なかった事業でした。この最後のニュースレターもそうですが、書籍出版においては企画から校正まで全てにわたり出版社や著者との連絡、翻訳、校正の確認、ニュースレターでは版下作りまで、全てに渡る実務を担ってくださいました。ここに感謝の言葉を記したいと思います。ありがとうございました。

詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～

この講座は、5 年間にわたって参加者に愛され、また大切にされ続けました。参加者は信徒も信徒でない人も、牧会者や神学生も加わって、まさに「Pastoral (牧会力を高める)、Spiritual(スピリチュアリティを養う)、Social(隣人のニーズに仕える)」DPC のすべてを表すもの、DPC の宝となりました。

事務局 福井貴絵子



2006 年～2018 年の 12 年間にわたって公益財団法人 JELA の主催により続けられた「リラ・プレカリア (祈りの豎琴) 研修講座」が終了した後、形を変えながらも「リラ・プレカリアの言わば精神を引き継ぐような何か」を DPC で行えないかという模索をしました。

リラ・プレカリアとは、病床にある方や心や身体に痛みのある方、死に瀕している方にハーブと歌による祈りをもって寄り添う働きです。研修生を教え育ててきたのはアメリカ福音ルーテル教会の宣教師であるキャロル・サック。2 年間の研修は非常に厳しく、聖書をはじめ多くの指定図書とワーク、毎日 3 時間のハーブと歌の練習が課題です。1 年半は週に 2 回東京の JELA とルーテル学院に通ってキリスト教と傾聴カウンセリングを学び、最後の半年間は週 3 回となり施設での実習が加わりました。新幹線や夜行バスを使い遠方から通い続けた人もいました。12 年間に 38 名の奉仕者が育ちました。

リラ・プレカリアのエッセンスを込めたこの講座を DPC で実施できたことは豊かな恵みでした。何よりもキャロル・サックの信仰と使命感によって、また講義の通訳を務められた中山康子、各回のファシリテーターをしてくださったリラ・プレカリア修了生たちの助けを得て成し遂げられたことを改めて感謝いたします。

毎回の講座はその回に与えられた詩編に基づいて進められます。PowerPoint を用いた美しい画像にイメージをふくらませ、時に音楽、時に沈黙を挟みつつ 90 分間のレクチャーがあります。その後、各自が自分の受けた印象や大切に思う言葉などを書き留め、少人数で分かち合

いの時を持ちます。このグループにはそれぞれリラ・プレカリア修了生がファシリテーターとして加わります。毎回読み上げられる「信頼のサークル」というグラウンドルールによって、この場での話が外に出ることは決してない、という信頼感のもとに分かち合いが進められるのです。最後に元の全体場に戻り、まとめのお話と静かな音楽を持って会が終了します。

全 7 期各 4 回、100 名もの参加者がこの貴重な学びに加わってくださいました。お一人おひとりに心より感謝いたします。

第Ⅰ期 2019 年 4－7 月、月 1 回土曜日午後開催、参加者 30 名

第Ⅱ期 2019 年 9－12 月、参加者 35 名

2020 年 4 月開講の予定の第Ⅲ期は延期し、これに代えてキャロル・サックによる詩編とハーブを用いた黙想のプログラム「沈黙の詩(うた)ー今、慰めを必要とされる方のために」を YouTube で配信。2020 年 4－5 月に 12 回配信。

第Ⅲ期 2021 年 9 月－12 月、オンライン (Zoom) での開催。参加者 23 名。繊細な音楽の配信についての技術的な難しさがあり、申込前に試聴していただくなど手探りでの開催でした。

第Ⅳ期 2022 年 4－6 月に 4 回開催。引き続きオンラインでの開催。参加者 32 名。

当初は第Ⅰ期から第Ⅳ期で完結の予定でしたが、参加者の強い希望もあり、オンラインで海外からの受講も可能となり、「新・詩編と祈り」として再編してさらに 3 つの期を開講しました。

新・第Ⅰ期 2022 年 9－12 月、参加者 40 名

新・第Ⅱ期 2023 年 4－7 月、参加者 33 名

新・第Ⅲ期 2023 年 9－12 月、参加者 39 名

デール・パストラル・センター年譜（2014年4月－2025年2月）

2014 年

- 4 月 デール・パストラル・センター（DPC）設立
- 6 月 28 日 第 1 回スピリチュアリティ研究会開催
- 7 月 DPC リーフレット作成
- 7 月 26 日 第 1 回デール記念講演会・創立記念シンポジウム「スピリチュアルペインとそのケア」
シンポジスト：ワルドマール・キッペス、窪寺俊之、賀来周一

2015 年

- 2 月 9-11 日 第 1 回臨床牧会セミナー（第 49 回教職神学セミナー）
主題：「それでも、主を見上げて～牧会の光と闇」基調講演「ルターと牧会」鈴木浩
- 7 月 11 日 ソーシャル講演会「死別を体験した子どもと大人と共に」大柴譲治
- 8 月 1 日 第 2 回デール記念講演会「魂への配慮の共同体・教会」加藤常昭
- 9 月 『スピリチュアルペインとそのケア』出版（石居基夫編著、キリスト新聞社）
- 11 月 7・14 日 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会スタート

2016 年

- 4 月 牧会研究会スタート
- 5 月 14 日 第 3 回デール記念講演会「21 世紀を生きる人間性の牧会的理解～90 歳をむかえて」
ケネス・J・デール
- 5 月 『90 才の信仰エッセイ 90』出版（ケネス・J・デール著、DPC 訳、私家本）
- 10 月 22・29 日 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会

2017 年

- 2 月 6-8 日 第 2 回臨床牧会セミナー（第 51 回教職神学セミナー）
主題「時代を生きる苦悩～魂にふれる牧会」基調講演「青年ルターと心の問題」江口再起
- 4 月 学院 HP リニューアルに伴って DPC のページ開設
- 5 月 20 日 第 4 回デール記念講演会「寄り添い人となる～全信徒祭司の教会」ケネス・ハーグ、アミ
ティ・ハーグ

2018 年

- 7 月 DPC 新リーフレット作成
- 10 月 6 日 第 5 回デール記念講演会「ここに重荷を負う人とともに」英隆一郎
- 10 月 14・28 日 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会
- 12 月 1 日 「DPC ニュースレター創刊号」発行（年 2 回、6 月・12 月発行）

2019 年

- 2 月 12-14 日 第 3 回臨床牧会セミナー（第 53 回教職神学セミナー）
主題「危機のただ中に立つ教会～あなたを支えたい」
基調講演「ぶっ壊して造り上げる牧 会のダイナミクス」関野和寛
- 4 月 「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」第Ⅰ期開講 キャロル・サック
- 9 月 「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」第Ⅱ期開講
- 10 月 5・12 日 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会
- 3 月 新型コロナウイルス感染症拡大により運営委員会開催中止、グリーフ「集まり」中止

2020 年

- 4 月 齋藤衛 DPC 新所長に就任/新型コロナウイルス感染症拡大により 2020 年度牧会研究会中止
「沈黙の詩（うた）今、慰めを必要とされる方のために」キャロル・サック 全 12 回 YouTube 配信
- 7 月 所員会オンライン開催（以後すべてオンライン）/ニュースレター学院 HP 上に掲載/グリーフ集まり対面開催（7・9・11・3 月開催）
- 9 月 「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」第Ⅲ期 開講延期
- 10 月 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会中止
- 10 月 16 日 オンライン牧会研究会「コロナ状況下でどのような牧会に直面しているか」堀肇
- 10 月 17 日・11 月 21 日 オンライン「詩編に聴くひととき」キャロル・サック

2021 年（記載のない会はオンライン開催、ただしグリーフ「集まり」・研修会はすべて対面開催）

- 2 月 8・15・22 日 第 4 回臨床牧会セミナー（第 55 回教職神学セミナー）
「いま、教会の牧会は～COVID-19 の只中で見ていること」吉岡光人、武井陽一、梁熙梅
- 4 月 2021 年度牧会研究会開講（年間 4 回：4 月、7 月、10 月、1 月）
- 9 月 「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」第Ⅲ期開講
- 10 月 2 日 第 6 回デール記念講演会「たましいの安らぎ―死を前にした人との関わりの中から」藤井理恵
- 10 月 9 日 グリーフ・サポート・グループ ファシリテーター研修会再開

2022 年（記載のない会はオンライン開催、ただしグリーフの「集まり」・研修会はすべて対面開催）

- 4 月 2022 年度牧会研究会開講、年間 10 回開催/「詩編と祈り」第Ⅳ期開講
- 6 月 ケネス・J・デール著「Where in the World is God?」日本語版出版をキリスト新聞社と契約
DPC ニュースレター第 8 号発行：特集「PGC 開設 40 年・閉所 10 年」（第 9 号に続く）
- 9 月 「新・詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」第Ⅰ期開講

2023 年

- 2 月 13・14 日 第 5 回臨床牧会セミナー（第 57 回教職神学セミナー）「暗闇の中で：助けを必要とする牧会者」オンライン開催
基調講演：石居基夫、発題者：秋久潤・小勝奈保子、ファシリテーター：三村修
- 3 月 20 日 ケネス・J・デール「神はいずこに 聖なる神秘の黙想」出版（谷口真理子訳、DPC 監訳、キリスト新聞社）
- 4 月 「新・詩編と祈り」第Ⅱ期オンライン開講、2023 年度牧会研究会対面開催
- 5 月 28 日 堀肇 召天
- 9 月 「新・詩編と祈り」第Ⅲ期（最終回）オンライン開講
- 12 月 1 日 DPC ニュースレター第 11 号 堀肇追悼号

2024 年

- 3 月 7 日 DPC 運営委員会対面開催
- 4 月 2024 年度牧会研究会オンライン開催
- 8 月 26・27 日 牧会研究会 Plus「いのちにつながるコミュニケーション 3」対面開催（市ヶ谷）三村修
- 7 月 4 日 2024 年度第 1 回運営委員会対面開催
- 10 月 19 日 「詩編と祈り 再びのつどい The Spirituality of Music」対面開催 キャロル・サック
- 11 月 4 日 第 7 回デール記念講演会「いのちのメッセージ 悲しみを通してみえること」若林一美
- 11 月 21 日 2024 年度第 2 回運営委員会オンライン開催 DPC 休会の承認

2025 年

- 2 月 11・12 日 第 6 回臨床牧会セミナー（第 59 回ルーテル教職神学セミナー）「召命の再確認―『主がお入り用なのです』（ルカ 19:31）」ファシリテーター成成鍾 ナザレの家にて開催

日本ルーテル神学校「デール・パストラル・センター規程」より抜粋

第3条 本センターは、ルーテル教会およびエキュメニカルな交わりにある諸教会を力づけ、牧師の牧会力を高め、信徒の霊性を養うことを目的とする。

2 パストラル、スピリチュアル、ソーシャルの3分野で、教会と現代社会を生きる人々の魂の問題に応えることを目的とする。

第4条 本センターは、日本ルーテル神学校の公認の機関であり、同神学校に対して責任を負うものとする。

第6条 本センターの運営は以下のとおりとする。

1 本センターに、その運営、財務などの責任に当たる運営委員会を置く。運営委員会は、ルーテル学院理事長（委員長となる）、所長、学長、事務長及び同神学校教員の中から2名以内とし、これに学外の有識者、および日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団から推薦される各1名によって構成され、同学院理事会の承認による。

3 所員は所長と共に本センターのプログラムの設定および実施に関する事項を処理する。所員は日本ルーテル神学校教授会において、本センターの設立とその活動の趣旨をよく理解し責任を分かち持つキリスト教会牧師及び信徒から選ばれた若干名とする。所員会は、所長と所員をもって構成する。

【歴代運営委員】

理事長：松澤員子（2014-2020）、大柴譲治（2021-）

所長：石居基夫（2014-2019）、齋藤衛（2020-）

学長：江藤直純（2014-2017）、金子和夫（学長代行、2017）、市川一宏（2018-2019）、石居基夫（2020-）

事務長：高瀬恵治（2014-2018）、坂田好和（2019-）

神学校教員：河田優（2014-2019）、立山忠浩（2020-2024）、宮本新（2024-）

学外有識者：堀肇（2014-2023）、吉岡光人（2024-）

日本福音ルーテル教会：大柴譲治（2014-2017）、関野和寛（2018-2023）、李明生（2024-）

日本ルーテル教団：

江本真理（2014-2017）、松川和義（2017-2021）、江本真理（2021-2024）、西川真人（2024-）

【所員】

所長：石居基夫（2014-2019）、齋藤衛（2020-）

所員：浅野聖子、石居基夫、賀来周一（-2016）、小嶋リベカ、齋藤衛、ジェームス・サック、関野和寛、成成鍾（2024-）、筑田仁（2024-）、堀肇（2023年5月召天）

【事務局】川田洋子（2014）、福井貴絵子（2015-）

● デール・パストラル・センター休会中のご連絡、お問合せにつきましては、日本ルーテル神学校事務担当までお電話でお願いいたします。0422-31-4611（学院代表）

● DPC ニュースレターバックナンバーは日本ルーテル神学校ホームページ上でお読みください。



編集後記

この10年間さまざまな集まりや会にお加わりくださり、心をお寄せくださった皆様、ニュースレターをお読みくださったお一人おひとりのことを思い浮かべながら、ここに「ペン」を置きます。尽きせぬ感謝と祈りをこめて。（ふ）

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：齋藤 衛
181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/lutheran/